

風塵往来 4

読書の一つの方法に、「つん読」があることは先刻ご承知の通りである。私など愛用すること夥しく、読書のほとんどをこの方法で過しました。『ヴァレリー全集』『埴谷雄高作品集』などのシリーズ物はもちろん、井筒俊彦、ロラン・バルト、中沢新一などの単行本を含め、数百冊が書棚の奥で待機中である。その中に二〇〇頁ほどの薄い文庫本（中公文庫）が混っている。折口信夫『死者の書』である。

実を言えば過去何回か読み始めたことがある。いずれも挫折した。ひそかに畏敬する評論家の川村二郎氏が「明治以後の日本近代小説の最高の成果である」と絶賛されているにもかかわらず…。一言で言えば、ゆったりした時間、空間の中で、芳醇な香りを味わい尽さなければならぬ年代物のワインのような書物なのである。

ところで、人形アニメーションの鬼才として名を馳せる川本喜八郎氏が、この書物の映画化に取組んだ。かつて『鬼』『道成寺』などの短編映画で、戦慄を見るほど鮮烈な映像美を開拓したアニメーション映画の監督である。

某日、東京への出張の翌日、休暇をとって、神田の岩波ホールに足を運んだ。国内外の映画コンクールですでに入賞している。映画評論家の佐藤忠男氏も「川本喜八郎氏の「一つの到達点」と太鼓判を押している。期待に胸彈ませない法はない。しかし、鑑賞後、何かがひつかつた。陶酔の境地に至らないのである。過去の絶品に比べると、手法に大きな差があることに気がついた。人形淨瑠璃風の非日常化された頭が今回使われず、より人間的な日常的な顔形に変わったこと、過去にはせりふは発せられず、字幕かナレーションがその役割を担っていたのに、今回は名だたる俳優がせりふを吹き込んでいたことなどが影響しているのか。夢のような世界に現代的な顔が現われ、肉声のせりふが聞こえてくると、途端に現実的生々しい匂いが立ち上ってくるのである。つまりこれらの手法は、アニメーション映画の非日常性に日常的な要素を加えてしまい、その抽象性、象徴性、幻想性の本質的な部分を取り除してしまったのが、思ひがけない。虚構は虚構に徹すればよかつたのに、という思いにかられる。

しかし評価の違いはあるとも、やはり川本監督による『死者の書』は記憶に留めるべき作品であろう。少なくとも折口信夫の晦満開ではない世界を身近なものとし原本に当たりたいという希望を多くの人にもたらしたであらうから。

（館長 伊藤郁太郎）

展示室から

特集展 花のある器 (~7/23)

中国、韓国、日本のやきものの中から、花の文様のあるものや花をかたどったものなど、花にちなんだはなやかな器約20点を展示します。百花繚乱、色とりどりの花の器をお楽しみいただけます。企画展とともに、当館での「お花見」はいかがですか？

蓮、椿、梅から想像上の宝相華にいたるまで東洋のやきものに花咲いた文様やその表現は時代や地域によってさまざまです。そしてそこには美しい花を表現するというだけではなく、吉祥の意や世界観、思想なども込められています。(写真下)は墓に副葬するためにつくられたもので、褐、緑、白の三色で宝相華文が華やかに表されています。死後の世界も豪華に彩ろうとしたのでしょうか。

写真上
重要美術品 紅縁彩牡丹文碗 磁州窯系
金時代・泰和元年(1201)在銘
高4.0cm、径15.5cm 個人蔵

写真下
三彩宝相華文三足盤 唐時代・7世紀
高6.6cm、径23.6cm
Acc.No. 10883(住友グループ寄贈)

展示のおしらせ
4月4日(火)～7月23日(日)
 ◆企画展
牡丹—花咲く東洋のやきもの
 ◆特集展
花のある器
 ◆常設展
東洋陶磁の展開
(安宅コレクション中国・韓国陶磁、日本陶磁、李秉昌コレクション韓国陶磁)
 ◆休館日：月曜日(7/17を除く)、7月18日(火)
 <展示替期間>7月24日(月)～8月1日(火)
 開館時間：午前9時30分～午後5時
(入館は閉館の30分前まで)



五彩牡丹文盤
景德鎮窯 明時代・万曆(1573-1620)
径38.5cm Acc.No.10752(住友グループ寄贈)

編集後記

◆今年の梅の花は遅く桜の開花は早いとか、この通信がお手許に届く頃には桜は満開でしょうか。今回のテーマの牡丹は中国でも古くから愛され、唐の詩人李白は楊貴妃の艶やかさをこの花になぞらえてうたっています。5月に行われる世界バラ会議2006では、お隣のバラ園も会場の一つとして昨年より様々に手が加わり、最盛期にはどんなに

美しいことかと楽しめます。東洋の牡丹と西洋のバラがともに咲き誇る中之島に、どうぞお出かけください。(S.S.)

ボランティアの窓

◆「どちらからお越しですか」いつもこの一言からガイドが始まる。緊張と期待の一瞬だ。毎回、必ずと言って良いほど、遠来のお客さまを迎えるが、驚いたのは韓国からの訪問!

しかも「国立中央博物館」でガイドをしている」に二度びっくり!日本人の見学が多いので、大阪に住んで語学学校に通うという熱意に頭が下がる。化粧気もほとんどなく、物静かで内に情熱を秘めたその女性は、文字通り「高麗

の人」のように思われた。いつか必ずソウルで「ト マンナヨ」。(M.T.)

大阪市立東洋陶磁美術館

友の会通信 通巻第77号

2006年4月1日発行 No.22-1(年4回)

編集・発行:大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局
〒530-0005 大阪市 北区中之島1-1-26
TEL.06-6223-0055
<http://www.moco.or.jp>
デザイン:清嶋滋+studioTWEN 印刷:岡村印刷工業株式会社



Fig.1
「賢聖障子」の獅子・狛犬（仁和寺蔵）



Fig.2
重文・灰釉狛犬 駄
室町時代・14～15世紀（深川神社蔵）



Fig.3
鉄釉狛犬 阿・吽
室町時代・応永25年墨書き（伊勢八幡宮蔵）

今日は、瀬戸・美濃のこま犬の個性的な一面を紹介させていただきたいと思います。はじめに狛犬一対の基準作と、陶磁資料館に200体のこま犬を寄贈してくださった本多静雄さんについて紹介したいと思います。

こちらは、仁和寺の「賢聖障子」に描かれた獅子・狛犬（fig.1）です。向かって右の獅子は、阿形で角がなく、たてがみが直毛で体の色が群青、左側の狛犬は吽形で角があり、たてがみが巻き毛で体の色は緑青、いずれも岩座に座しています。体の表現について細かい決まりごとがあったということを初めに見ていただきます。

本多静雄さん（1898～1999）は豊田市出身で、京都帝国大学（現京都大学）を卒業後、戦前は逓信省に勤務され、戦後は日本電話施設株式会社を創設されました。コレクターとしては考古学的資料を系統立てて陶磁史を研究し、猿投・瀬戸・渥美の古代から中世の陶磁器をたくさんお持ちでした。この過程でこま犬にも出会われていったそうで、そのコレクションのほとんどが陶磁資料館に寄贈されたわけです。陶磁器の研究ブームは、瀬戸や美濃でも盛り上がり、昭和3年瀬戸の加藤唐九郎が古窯調査の報告会を瀬戸市内で開き、昭和5～6年の瀬戸の古窯調査、昭和6年に美濃の元屋敷窯の調査、7年に岐阜の大萱窯下窯の調査などが続いて行われました。本多さんは昭和20年頃、故郷の豊田市平戸橋で加藤唐九郎に出会い、この出会いによって陶磁器に興味を持ち、戦後まもなく陶磁器の収集を始められました。昭和21年には瀬戸で行われた小山富士夫先生の小長曾窯の発掘調査に参加されて、昭和29年に今度はご自身が、有名な猿投窯の発見をされることになりました。こま犬に関しては、昭和34年、香取神宮で瀬戸のこま犬一対（現・重文）を拝んだ後に、鹿島神宮に行ったら、偶然瀬戸のこま犬を見つけたと、それが『陶説』にちょっと興奮した気分で報告され、これもこま犬と自分との縁が深まった出来事の一つだったと書いておられます。その5年後の昭和39年に名古屋で本多さんが中心になって、「ふるさとのやきもの こま犬展」という展覧会が開かれました。このときに特に江戸時代のこま犬は何年という銘を持っているものが多いため、陶磁史を解明していく上でとても意味のある資料になると思われたそうです。本格的な収集が始まったのはこれ以降だそうです。その収集と研究の成果として、昭和51年には『陶磁のこま犬』という豪華本が求龍堂から出版されました。この本ではこま犬の編年を試みられていますが、室町・桃山時代は伝世品を基準に深川型（深川神社伝世）、香取型（香取神宮伝世）、根津型（伝利休所持獅子香炉）、伊勢型（伊勢八幡宮伝世）を設定し、更に「賢聖障子」にあるような堂々とした体のものを獅子型、それよりもほっそりとした香取型のようなものを山犬型として分類し、遺跡出土の資料も併せて検討しておられます。江戸時代は紀年銘のあるもの、ないものを問わず、個人所蔵のこま犬も併せ膨大な資料を紹介しておられます。その後、こま犬については一通りやれることはやったという思いをもって、200体のこま犬を陶磁資料館にくださったのです。本多さんは、ご自身がエンジニアでしたので、技術史というのが自分にとって一番興味がある分野だと、だからこま犬愛好家というよりも、陶磁史を確立するという視点で収集したのだと語られています。愛知県陶磁資料館の西館でこま犬をいつも見ていただけるようになったのは昭和57年以降のことです。

さて、陶磁のこま犬の一番古い資料は、13世紀末の遺跡出土の例です。瀬戸市内の洞山窯から出たもので、これをもって陶磁のこま犬は13世紀末には作られていたと考えられています。14世紀になりますと、萱刈窯、赤津長根窯、孫右衛門窯、赤津川横根窯などで作られていたようです。15世紀の例としては、鶯窯、山口八幡窯、惣作・鐘場（住居址）、岐阜市の正明寺城之前（住居址）、横峰窯、菊畠窯、多治見市の小名田窯下窯などの出土例があります。16世紀になりますと、多治見市の小名田窯下窯、清洲城下町遺跡などから、個性的なこま犬の資料がたくさん出ています。

伝世のこま犬については、14世紀から15世紀というのは、深川神社の1点（fig.2）しかありません。薄い色の灰釉が均質にかけており、非常にしっかりした作りで、きちんとこまやかな細工がされています。胸毛が細かくかかれていますが、たてがみが非常に細やかな細工です。前肢は意外に細いです。尻尾はあまり大きくはないですが、毛先が五つに分かれた尻尾を持っております。深川神社は、産土神社で陶祖藤四郎を祀る神社もありますので、瀬戸の人にはたいへん大切な、信仰を集める神社です。

伊勢八幡宮に伝來したこま犬（fig.3）は、本多さんが山犬型とされた典型的の一つです。特徴は、顔立ちと体つきです。細い体と、まっすぐ下に降りる前肢。瀬戸こま犬のとても特徴的なものです。台座の裏に「応永二十五戊戌十二月朔日 熊野 願主 浄通」と墨書きがあります。この墨書きについては字の崩し方、墨の色などいろいろな検討がされて、その時代のものでよかろうということになっております。この銘を持つこともあり、愛知県の文化財の指定を受けています。本多さんが発見した、伊勢型に似ているものが、鹿島神宮のこま犬です。陶磁資料館には伊勢型に似ている、ということがあります。頭頂部が線刻されて、オールバックにくしきずられているような形です。伊勢八幡宮のものは、眉上隆起が盛り上がってたてがみが立体的に表現されていますが、陶磁資料館のものは全部櫛目で表現されています。

香取神宮の灰釉こま犬一対は、根津タイプと良く似ています。櫛目でたてがみを表現し、目玉を表現しない（白眼）などの共通点がありますが、相違点もあります。香取の方は体が細くしなやかで、頸は長く、額は扁平で鼻にすっと繋がるそんな顔つきです。陶磁資料館の香取型（fig.4）は、松永耳庵というお茶人の旧蔵品で、松永記念館が閉鎖されることになって、寄贈していただいたものです。鹿島神宮で本多さんが見つけられた3体のうちの1

点は香取型のこま犬です。これは高さが30cmほどあります。肩から上のバランスが大きく、ほかの香取型と異なり、尾端がワラビのように巻き込まれた三つ股の尾になっています。頭部には角があった痕跡があります。

根津美術館のこま犬は、阿形なので口の部分から頭を搔き割られ、獅子香炉として伝えました。そのように仕立てたのは、利休であると伝えられています。香取型とはやや異なり、体は太く、鼻は大きく短いなどの特徴があります。陶磁資料館の吽形（fig.5）は、サイズも特徴もたいへん似たもので、いつの段階でこうなったのかはわからないのですが、これも香炉仕立てになっております。伊勢八幡宮に1点伝わる根津型の吽形は漆黒の鉄釉が使われていますが、陶磁資料館のものが歯を少し見せているのに対して、完全に口を閉じています。

このように見えてみると、伊勢八幡宮、香取といったような、細身のこま犬、これを山犬型というふうに本多さんも分類しておられます。こういう細身のこま犬というのが、一つ注目できるものではないかと思います。では、山犬とはなにかといいますと、それは狼なんだそうです。ニホンオオカミ、犬が野生化した野犬、これらをまとめて山犬というそうで、瀬戸・美濃のような山のなかで生活しておりますと身近な動物です。また、山犬型である、伊勢型、香取型には、それぞれまったく同形のものがいくつかあることも、注目できることではないかと思います。

次に、室町・桃山時代に見られた山犬型のこま犬を、江戸時代の多様化したこま犬の中から見つけてみよう試みました。動物学的にいいますと、狼と犬は簡単に混血の子供ができるそうで、実際のところ野犬なのか、狼なのかを見分けるのも難しいそうですが、江戸時代のこま犬の中で、野生化した野犬タイプと、どう見ても犬と思える家犬タイプがあり、家犬タイプとはいながらも、実はなかなか迫力のある顔をしたものもあります。

更に、野犬型でも家犬型でもなく、どう見ても狐にしか見えないような、口が細い顔のもの（fig.6）がいくつかあります。これは実は、山岳地方にある犬に関する信仰と関係しているようです。秩父に三峰神社というのがあり、こちらは狼を祀っています。山岳地方に狼信仰というのがあるんですね。奥多摩の御岳神社や、愛知県近郊では奥三河の鳳来寺に山住さんと呼ばれるお犬様信仰があります。岐阜県の恵那郡の中山神社にも権現さんと呼ばれるお犬様信仰があります。そのような神社のお札を見ておりますと、狼が描いてあるんですが、皆口が細く、頸が長く、尻尾がすっと長くて下にたらしている姿です。狼を知らない私などには、狐のように見えるのですが、調べていくうちに狐と思っていたものは、このグループに入るのはないかと思い始めたのです。このお犬様というのには持っていると魔よけになる、そして狐憑の狐が落ちるんだそうです。狐憑というのは、当時は深刻な病気だったようで、狐を落すにはいろんな手立てがあったそうです。その一つが天敵を利用するというもので、その天敵が狼だそうです。犬も天敵ですが、犬よりもはるかに力が強いのが狼だということです。ずっと狐と思っていたものが狐の天敵の狼かもしれない、そのようなことを考えておりましたら、実は本多さんがこのこま犬のことを中山神社から借りて来たと書かれているんです。中山神社の権現さん、お犬様をそのまま陶磁資料館がいたいでいるわけなんですけれども。土地の人は、魔よけにもなるものですから、中山神社へ行ってお犬様を借りてくる、そして災いがいたら返すんだそうです。お札として二体にして返すとか、いろんな返し方があるそうなんですが、そういうものなんだそうです。

狼型、つまり山犬型というものを今回まとめてお話させていただきましたけれども、実は瀬戸や美濃のこま犬というのは、お犬様的な性格もちょっとあるのかなという気がしております。特に、江戸時代のものに関しては本多さんが自身が集められた膨大なデータがあり、奉納者と奉納先などについて調べてみたところ、瀬戸、東濃地区、長野の一部などほんとに地域的なものということがわかります。このことからも、この時代の瀬戸・美濃のこま犬については、地域的な民間信仰にかかる面があるのではないかというような思いをいたしました。ちなみにそれ以前のものに関しては、逆に関東や関西などの遠方にまで行っていること、伊勢の墨書きには熊野系の修験者の名前があること、などの特徴があげられますか、何と言っても資料が少なく、よくわからないのが現状です。

また、狼についてもう少し言葉をくわえさせていただきますと、明治38年に報告されたのが最後で、ニホンオオカミというのは、絶滅してしまいました。狼については風土記の時代から江戸時代に至るまで、狼害や民話なども含めて、いろんな報告が残っておりますし、分布は北海道から九州にいたるほぼ全域であったといわれます。また、悪いことだけではなくて、田畠を荒らす鹿とか猪の天敵であったそうなので、山の人にとっては、ありがたい動物であったわけです。当時の人にあっては、狼は剛毛瘦身で口が大きくて、恐ろしいというイメージがあったようですが、同時に益獸であったということも忘れてはならないのではないかと思います。大きさは中型の犬ぐらいで、前肢が肩からほぼ真下に付くそうで、狼肩というそうですが、犬とちがうところはその点です。それから足跡は犬が丸いのに対して、細長いんだそうです。また頭骨を比較すると、額が狭く鼻にかけて直線に近いそうです。これまで紹介しましたこま犬に、いくつかそういうタイプがありましたが、瀬戸・美濃のこま犬を考える時には、当時の人たちが作る物に対してどのようなイメージを持っていたかを知ることも重要ではないかと思いました。江戸時代までは動物信仰というのがあったと思いますし、狼というのもその一つではないでしょうか。陶磁資料館のほかのこま犬についても、このような視点からの検討を加えるとおもしろくなるのではという思いがしております。今日は、瀬戸と美濃のこま犬の、神社の参道にある狛犬とは、ちょっと違う個性的な一面を紹介させていただきました。

2006年2月25日（土） 大阪市立東洋陶磁美術館 講堂



Fig.4
灰釉狛犬 駄
室町時代・15世紀（愛知県陶磁資料館蔵）



Fig.5
灰釉狛犬 駄
室町時代・15世紀（愛知県陶磁資料館蔵）



Fig.6
鉄釉狛犬 駄
江戸時代・寛文5年銘（愛知県陶磁資料館蔵）



プロフィール
かみさき
神崎かず子氏
兵庫県出身。南山大学文学部人類学科卒業。
昭和美術館（名古屋市）に勤務後、平成2年より愛知県陶磁資料館に勤務。